



5月

今月の江戸しぐさ「道はお城の廊下」

戦国時代から明治初期にいたるまで外国人が日本に来て驚いたことの一つに、自分たちの国を含め、どこの国にもない清潔を好む民族性がありました。江戸時代が始まる前からとことん清潔な民族であると記録されています。

(ポルトガル宣教師、ジョアンロドリゲス)

貧しい家でさえも整頓され床が綺麗に拭かれ、一輪の花が生けられている様子に驚いている様子が記録されています。また、人々が朝夕の道の掃除を日課としていることや、明治初期のバードという人の日記では、街道があまりにも綺麗にされているので歩くのも躊躇したとも記されています。

現代の日本人はどうでしょうか？ タバコの投げ捨てや飲み終わった缶を道端にすてること等が平気な人の多い民族になってしまいました。

病院は何より清潔を要求される場所です。しかし薬袋の切れ端や止血ガーゼ等廊下に物が落ちやすい環境です。見逃さずに拾って、その後に手をよく洗いましょう。

※江戸思草は、江戸時代の町民が良いとされること、悪いとされることなどの生活の規範としていたものです。

判断の基準は粹かどうかだったようです。

粹の概念は武士の武士道に対抗するものだったという説があります。他の国にない、一般庶民の高度な精神性が、当時日本に来た外国人に驚きをあたえていたことが多数記録されています。

ヘレン・ハイド

Helen Hyde(1868~1919)

日本を愛したアメリカ人版画家。

江戸の風情が強く残っていた明治期に10年以上滞在し、女性の視点から愛らしい子供の作品をたくさん残してくれました。

当時の外国の観察者の多くが、西洋諸国と子供の様子や子育ての考え方が根本的に異なっていることに驚いていました。



新しいほうき

